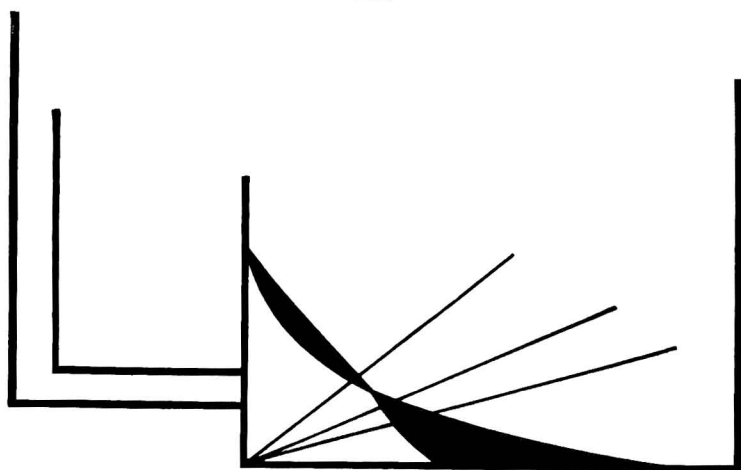


# 井 上 靖 集

新選 現代日本文學全集

21



筑 摩 書 房 版



井 上 靖 集

昭和三十四年一月十五日 発行

著 者 井 いの 上 うえ 靖 やすし

発行者 古 田 晁  
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山 田 一 雄  
東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所 筑 摩 書 房  
東京都千代田区津田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)  
振替 東京一六五七六八

整 版 株式会社 精 興 社  
印 刷 株式会社 精 興 社  
製 本 有限会社 矢島製本所

井上靖集 目次

黯い潮	五
黒い蝶	三
天平の薨	一五
早春の墓参	二六
比良のシヤクナゲ	三六
澄賢房覚え書	四
玉碗記	二七
或る自殺未遂	二八
楼門	二九
北の駅路	一〇一
暗い平原	三〇
末裔	三四

大洗の月	三三
胡桃林	三九
蘆	六五
満月	三三
利休の死	四二
異域の人	四九
信松尼記	四六
井上靖論	河盛好蔵 四六
解説	山本健吉 四三

装幀 恩地孝四郎  
 恩地邦郎

井上靖集



## 第一章

二日の休暇をとつて、その二日を沼津の佐竹兩山の家で、久しぶりで家庭的な雰圍気の中に過して来た速水が、小さなポストンバッグを持つて、有楽町のR新聞社の三階の編輯局に姿を現はしたのは、もうかれこれ十一時に近かつた。

有楽町の省線のホームに降り立つた時、長い記者生活の習性で、速水はホームの前に立ちただかつてゐる新聞社の建物に眼を遣つたのだが、三階の窓といふどの窓からも、まだ宵の口のやうな明るい電気の光が洩れてゐた。その時、直観的に何かあつたのではないかといふ氣持はしたのだが、編輯局の入口で、社会部の陣取つてゐる奥の方の一角に、二三十人の社員が雑然と散らばつて、その中に部長の山名やデスクの連中の姿が混じつてゐるのを見るまでは、實際のところ大したこととは考へてゐなかつた。

編輯局へ入つて、なんとなく事件時特有のものらしい空気に触れ、こいつあ、相当大きな事件だと思つた瞬間、真先きに彼の頭を占め

たのは、国鉄整理にからんで、組合側がストライキを発令し、政府がそれに対してつひに非常事態宣言を出したなどいふことであつた。それ以外に、これだけの陣容が居残る場合はちよつと考へられなかつた。

「何があつたの？」

速水は、鞆を長く一列に並べてある社会部の机の一番隅つこに置くと、そこに居た若い警察廻りの記者に声をかけた。

「下山総裁が行方不明になつたんです。号外見ませんでした？」

「見ない。いま沼津から帰つたばかりだ」

事件は彼が想像したものとは違つてゐた。何か陰惨なものを含んだ暗い感じが、彼の心に押しかぶさつて来た。若い記者は、机の上に散らばつてゐる新聞をあちこちめくつて、どこからか一枚の号外を探し出してくれた。

「自社だけです。号外を出したのは」

S社もO社もU社も号外はちよつと蹲つた形だつたが、自社は部長の山名一人の判断であつさり決まつてしまつたといふ。

速水はその号外に眼を通し、それからそこに散らばつてゐる朝刊の仮刷の記事を、とびとびに拾ひ読みしてみると、部長の山名が少し酒の入つてゐる赤い眼をして、

「いつ、帰つて来た？」と彼に近づいて来た。

「たつたいま。二日あけると、これだからね。凄まじい世の中だ」

山名は、さう言ふ速水の横から、速水の持つ

てゐる新聞をいつしよに何となく覗き込んでゐたが、

「どう？ これ、やつてみないかい」

持前の抑揚のない静かな口調で、山名は紙面から反らした視線を、編輯局の隅の方に投げたまま言つた。

「あいにく、警視庁の主任記者が北海道へ行つてゐて空いてゐるんでね。しかし、警視庁の方は筑と東野村があるから、どうにか行くだらう。やつて貰ひたいのは警視庁ぢやあないんだ。デスクの方が三人とも手いづばいで、これが大きく發展すると、そこからは人が割けない」

山名は、人を説得する時いつもさうであるやうに、粘つこい廻りくどさで、ぼそぼそした口調で言つた。

山名の言ふことは、なるほどその通りだつた。大きい事件では、帝銀事件、平事件が未解決のまままで残つてをり、それにソ連からの引揚者の各地における乗車拒否、国鉄整理の強行、それに対する全国各地の組合の、表面静かだが、底に嵐を孕んだ不氣味なざわめき、どれ一つとして眼をはなせるものはなかつた。それでなくては、さへ副部長三人が、この上新しい事件を受持つといふことは、實際問題として不可能なことだつた。

しかし山名が速水にこの事件を主任記者として統轄しろといふその言葉の底には、また別の意味も含まれてゐた。それが速水にも、多少心に沁みる痛さで感じられるのであつた。



速水卓夫が四十を越した年配で、未だに社会部の遊軍記者として、派手といへば派手、のんきといへばのんきだが、その年齢からすれば、それにそろそろ佗びしさの影の付きまといつて来る役名のないポストに収つてゐることは、日頃からそれとなく心を使つてゐる山名の、いかにも山名らしい人情的な氣の配り方だつた。いつまでも、ばやばやしてゐるな、こちらでひと花咲かせろよ。山名はかう言ひたいのである。

速水の同期生の中では、速水が一番遅れてゐる。すでに彼の仲間から何人かの部長も出てゐる。未だにひらの記者として、しかも早急にはどうにもなりさうもないぱつとしない澱んだ雰圍氣を速水は、いつともなく身の廻りに形成してゐた。新聞記者として生涯をやり通すのか、やり通さないのか、ちよつと判断に苦しむやうな、熱情を喪つた妙にそうけた印象が、彼のどこかにはあつた。チェックの背広などを、無造作な恰好で着こなし、よく見るとおしやれだ、遠目にはその崩れたところだけが浮いて見えた。酒を飲むと、ひどく横顔が淋しくなる。酒を飲まないでも、一人きりでホームの外れで電車を待つてゐる時などの背後姿は、風にも吹かれてゐるやうな妙にたよりない印象を人に与へた。かうした彼の風貌姿態が、新聞社のやうな、太い線と荒いタッチの人間が強引に人を排してのさばつて行く社会では、一割も二割も損だつた。

仕事は緻密で、そつはなかつたが、軀で押し

て行くやうな熱情的な力はなかつた。どこからか絶えず、隙間風に吹かれてゐるやうな、いつも醒めたところがあつた。そんなところが、社会部記者として致命的といへば致命的だつた。二十代に一度結婚したが、二三年でそれに破れると、あとは今日まで独身で通してゐる。彼の何ものが欠けた印象は、そんなところから来るものとも、逆にさうしたものが、彼に人並みの家庭を持たせないとも見られた。

彼は部でも、多くの場合孤立してゐた。人づき合ひは決して悪くはないのだが、若い連中に取巻かれて、有楽町界隈を飲み歩くといつたこともなく、社会部記者たちが幾つも造つてゐる若々しいがさつな渦からは、いつも、遠くに離れてゐた。それに無口でもあつた。さうした点、社の幹部からは彼が人を轄べる能力はないと見られてゐるやうであつた。

しかし、若い記者たちの眼には、さうした彼に何となく惹かれるところもあるらしく、毎年春秋二回の新聞休刊日に開かれる部の懇親会の席上などでは、彼の周囲には若い記者たちが一番多く集まつた。こんな機会でない、このどこか一風交つた不遇な先輩記者とはゆつくり語れないといふ氣持もあつたが、またそれとは別に、彼が内にしまつてあることとなくネガティブな得体の知れない冷たいものに触れてみたいといふ無意識の欲求も働いてゐることは争へなかつた。

二三年前のことだが、彼はその宴会で、あと

にも先きにも一度だけ、自己の人生觀のやうなものを口走つたことがある。

「俺は小さい時、母親か女中か誰か知らないが、ある人に背後から抱きかかへられて、庭の隅の古井戸を覗いたことがある。ひどく深い井戸で、一面に羊歯が茂つてゐる間から、底の方に小さく、水面が見えた。俺はそこに、小さな錆びた鏡でも置かれてあるやうな氣がした。今ならなんのことはないが、なにしろ俺は七つぐらゐだつたらう。ぞつとしたね。怖いんぢやあない。子供ながらにやりきれない氣持なんだ。なんといふか、こんな地面の深いところに鏡がある！その時、俺の心の中に、俺の人生にとつて最も大きい關係をもつ何ものが飛び込んで来たんだ」

飲めば飲むほど蒼白む性質で、いつも彼の場合、いつかうに酔つてゐるのか、酔つてゐないのか見当がつかないのであるが、どうした調子なのか、そんな憑かれたやうなことを口走つて、その時彼は不意に立ち上つた。そしてそのままふらふらと、横に彼を取り巻くやうにして坐つてゐた若い記者たちの間に、横倒しに倒れ込んで来た。みんなはその時初めて、彼がひどく酔つぱらつてゐることを知つた。

「もし、そんなことがなかつたら、俺は二十五の時友達の肩を割つてゐる。三十の時左翼運動に走つてゐる」

それから、彼を抱き起さうとする多勢の手を振り払ひながら、

「三十五の時俺は女に惚れてる。四十にして市井に名をなしてゐる」

呷鳴つたのには違ひなかつたが、呷ふやうな不思議な調子があつた。戦前の学生が満洲の歌を呷ふやうな、感傷と慷慨のこもつたもので、若い記者たちには一座の乱雑な話声や呷声にまじつてそれが途切れ途切りに聞えた。無口な彼が、日ごろ心で思ひ考へてゐたことが、酔ひの力を藉りて、一つ一つ、その吐け口をみつめて噴き出して来たやうな、その時の感じだつた。

その時の彼の言ひ方をもつてすれば、幸か不幸かさうでなかつたから、一切が彼はその反対だつたといふことになる。實際、彼は常に、ある意味で、怠惰とも言へたし、無氣力とも言へた。少くとも、人生に対する受身の、その傍觀者的な姿勢は、もはや彼の身についたもので、終生彼から取り去ることは出来ないもののやうに見えた。

しかし、そんな、新聞記者としてのして行くやうなタイプではなかつたが、担当した仕事は投げなかつた。仕事を追ひかけてゆく執拗さは、派手ではなかつたが、やはり今の駈出しの記者のまねて出来ないものがあつた。満洲事変当時、記者生活を振出した古参記者だけの持つ、修練から得た粘りが、自ら努めなくても身につけてゐた。

「どう、やつてみないか」

と山名から言はれた時、速水は返事は口に出さず、煙草を口に銜へたまま、二三度、無造作

に頷いた。速水にすれば、山名の気持は暖く感じられたが、しかし、それを押し戴くほどの大した感慨があらう筈のものでもなかつた。

その夜、宿直の記者たちの他では、速水と副部長の石井が泊ることにして、山名も他のデスクも、多勢の記者たちも、みんな終電で家へ帰つて行つた。

速水は五階の宿直室に入ると、窓際のベッドを占領して横になつたが、なかなか眠れなかつた。下山総裁の行方不明事件も事件だが、それに関する何事も起らうとは考へられなかつた。この事件の発生を耳にした時、ふと心を感じたあの陰惨な暗い蔭はいつか消えて、なにかひどく他愛のない事件のやうな気がして来た。明日の朝になれば、下山総裁は彼も一度行つたことのある池上の自邸へちやんと帰宅してゐさうな気がして、社の連中も、少々神経質になり過ぎてゐるのではないかと思はれた。

佐竹景子の唇を固く結んで、顔を横にそむけた固い印象に、速水はいまも拘泥してゐた。宿直の記者たちの寝息があちこちから聞えて来る宿直室の狭い闇を見詰めたまま、速水は、景子と沼津の千本浜で別れてからまだ五時間とは経つてゐないことを改めて頭の中で計算した。そして今や自分の人生において、全く新しい一つの色彩を持つた時間が流れ出してゐることを感ずるのであつた。思ひがけず自分の心に生れた景子への愛情を、誠実に、真摯に育てて行かうと思ふ。はなやいだ気持はなかつた。強ひて言

へば、くろい潮の流動する中に、時折隠頭する青い藻の動きを見詰めてゐるやうな、暗い、しかし静かな、それはどこか祈りに似た感情だつた。

速水が殆ど二十年ぶりで、新聞社に訪ねて来た佐竹雨山に會つたのは昨年の五月であつた。正午を過ぎて間もない頃、面会があるといふので、速水が表玄関の受付まで降りて行くと、初めはちよつと見違へたほど老けた雨山が、先方はすぐ彼を見付けて、階段を降りて来た彼の方へ、老人とは思はれぬ若々しさで、よおと、声をかけながら近づいて来た。芸術家といふもの磊落さを、速水は中学時代に、その凶画の教師をしてゐた雨山によつて初めて知らされたのであつたが、茶色のレインハットを頭に載せ無造作に背広を着てゐる恰好といひ、二十年後の今日も変わらず、雨山は不遇で清潔な老画学生といつた感じだつた。

「早速だが、今日は君に厄介な話を持ち込んで来たのだよ」

と、その時雨山は言つた。

まあ、お茶でも飲みながら、ゆつくり伺ひませうと、速水は老旧師を社の近くの喫茶店に連れ出し、そこで彼の要件を聞くことにした。美味い珈琲屋を選んだのだが、雨山は珈琲にはほんの一寸口を付けただけだつた。

「ばかなことだが、僕は一生をかけて色彩の研究

究をやつてね。今年満で六十だから、丁度四十年やつて来たことになる」

銀色に光る白髪を、雨山は、若い者がするやうに、時々手で背後に撫でつけながら語つた。

それを最初思ひ立つたのは美術学校を卒業した年だといふ。それから今日まで、佐竹雨山は中学の図画の教師をしてゐる時もそしてそれをやめて土地の二三の学校の嘱託になつてゐる現在も、その傍ら一貫して色彩の研究に没頭して來てゐるのであつた。

「色彩の研究と言つても、詳しくいへば、僕のは、日本色彩文化史の研究といふのだがね」と雨山は言つた。

速水には全くの初耳だつた。静岡県東部の、夏期だけ東京の植民地のやうになる小さな避暑都市の中学校の校庭で、生徒に写生をやらせながら、自分は両手をズボンポケットにつつ込んで鉄棒の向うのクローバのいつばい生えてゐる草原をぶらぶら歩き廻つたり、或ひはそこに腰を降ろして、終業の鐘の鳴るまでは立上らないであつたりする、他の教師とは一風交つたずばらな雨山の書生つぼのやうな姿が、速水の知つてゐる二十年前の佐竹雨山のすべてであつた。迂濶なことですが、知りませんでしたね、と速水が言ふと、

「知らんだらうよ、君の時代の人は。あの頃はまだ僕の仕事か海のものとも山のものとも解らん頃だつたからね。しかし、あの頃でも、君たちには悪いが、図画を教へるのはいい加減にして、僕の頭の中は、色のことはかりだつたさ」そんなことを話しながら、時々速水の方に向ける雨山の眼は実に美しかつた。心の穏やかな美しい人柄が、いつも笑つてゐるやうな二つの小さい眼から感じられた。老年までこんな邪気のない美しい眼を持ち運んで来た人に、速水は初めて出会ふ思ひで、老旧師の人柄を改めて見直す氣持だつた。

「お願ひといふのは他でもないが、その僕の『日本色彩文化史の研究』といふのが十二部から成つてゐるが、それを三冊ぐらゐに分けて出版してくれるところはないかと思つてね。君が新聞社にゐるので、一応、まあ、口だけ掛けておいてみよう」と、今日話を持ち込んで来たまでのことさ」

速水の負担にならぬやうにとの思ひやりからか、雨山はそんな言ひ方をした。その時彼は全巻の目録と原稿の一部を持参してゐたが、全くさうした方面に門外漢の速水には、老旧師の生涯をかけての研究といふものが、いかなる価値を持つものか判断の下しやうもなかつた。

その日は、原稿の一部を預つて、速水は雨山と別れた。終戦直後の異常な出版好況期が終つて、出版界は漸く整理期に入つてゐた。戦後の新興出版社も、大資本を抱へてゐる老舗も、徐に迫り来る大不況時代を乗り切らうと、文字通りの死闘を展開しようとしてゐる時であつた。速水は心安い二三の出版社に、佐竹雨山のライフワークたる『日本色彩文化史の研究』の話を

持ち込んでみたが、勿論相手にされよう筈はなかつた。また速水としてもそれが相手にされようと思つての持込みでもなかつた。もし、かかるものに眼をつける奇特な出版社があつたら、その時は出版社の方から改めて雨山にあつて貰ひ、その上で雨山の研究が出版するに足る価値を有するか否かを、改めて判断して貰はうといふ甚だ自信のない氣持でもあつた。

速水が雨山から預つてゐる原稿の一部を鞆に詰めて、沼津の香貫山の麓の彼の家を訪問したのは、十月も末になつた頃であつた。半年近く預りつばなしにしてゐる原稿のことが時々思ひ出されて前から氣になつてゐたのだが、丁度その前の晩、高等学校時代の親しい仲間が五六人熱海で集ることになり、彼もそれに出席する筈であつたので、どうせ熱海まで行くなら、いつその機会に、その翌日ちよつと足を伸ばして、沼津の佐竹雨山の家まで原稿を持参しようと思ひ立つたのである。

沼津の街を外れて、静浦へ行く丁度中間ぐらゐの地点に、佐竹雨山の家は背後になだらかな香貫山の小丘陵を背負つて、旧街道からちよつと這入つたところにひどくひつそりとした佇ずまひで建つてゐた。人通りの少ない街路から二三段の小さい石段を登ると、そこは両方生垣で挟まれた細い路地になつてゐて、それが奥まつた玄關に通じてゐた。その路地を通つて行く時、縁側で籐椅子に腰かけてゐる着物を着た雨山の姿が、生垣の間から覗かれた。

三間か四間のこぢんまりした平家であつたが、いかにも雨山らしい清潔な感じの構へで、掃除の行き届いた小さい玄関の三和土に立つて、物音一つ聞えない静かな冷んやりした家内の空気に触れた時、速水はもう何年か自分が忘れてゐた人間が生きてゐる場所としての住居といふものを思ひ出した。遠い昔ではあるが、かつて確かに、自分はかうした場所に置かれ、かうした場所のできてゐたと思つた。

彼は大学を卒業してから十何年、眠る場所としての部屋をしが持つたことはなかつた。死んだ妻のはるみと三年程大阪の郊外で家を持つた経験はあつたが、その時代は小さい夕刊新聞社に勤めてゐて、朝から晩まで忙しく駆け廻り、ほんとに眠る時だけ家へ帰るといふ状態だつた。その後K新聞社に転じたが、その頃からあとは今日までずつと独身生活が続き、アパートや下宿を何十となく転々として暮して来た。転々したといつても彼の場合ただベッドの置き場所が變つただけの話だつた。眠るためにのみ彼は毎晩自分の部屋に歸つて来た。さうした彼の場合には異例だとしても、社の同僚のだけれど、佐竹雨山の營んでゐるやうな家を決して持つてゐないことを、その後、雨山の家を繁く訪れるやうになつてから、速水は時々感ずるのであつた。それは新聞記者の自ら気づいてゐない哀れさのやうにも思へ、さらに広く、都会の勤人のすべてが遅かれ早かれさうなつてゆく現代社会の持つ一つの宿命のやうにも思へた。

ともかく佐竹雨山は、家庭を持つてから今日まで四十年、妻の増代と一人娘の景子と三人で、この一つの場所で食べて、眠つて仕事をして来たのであつた。ここで悦び、ここで悲しみ、ここで怒り、ここで人間として生活して来たのであつた。短かい家庭生活の破綻からそれに続く今日までの荒涼とした磧を歩き続けて来た速水には、初めて遠く忘れてゐた故郷を思ひ出したやうな驚きが、佐竹雨山の家庭にはあつた。

雨山は小さい中庭の見える八畳の書齋で、自分の研究の内容を速水に説明するために、時々立上がつて行つては、書物を持つて来たり、戸棚を開けて資料を整理してある幾つかのボール箱を持出して来たりした。速水がこれまで見て来た学者たちの書齋や研究室とは全く異つてゐた。大型の本箱が一つと小さい机が一つ清潔に置かれてあるだけで後は何もなかつた。必要な書物以外は、一冊の余分の書物も雨山は貯へてゐないやうであつた。

しかし、整理カードやノートは門外漢の速水がみても見事であつた。古事記、日本書紀から六国史、扶桑略紀、百鍊鈔、本朝世紀、榮華物語等の歴史の大筋から、万葉集、懷風藻、古今集を初めとする各種の勅撰和歌集、それから竹取物語を筆頭に平安朝以降の物語文学、さらにまた大宝令、延喜式、類聚三代格、法曹主要抄、政治要略等の諸全集、さては公卿の日記類に至るまで、あらゆる史籍古文書類から、凡そ色に関する箇所は、尽く抜萃され、それがそれぞれの

目的のために整理分類されてゐるのであつた。雨山に言はせると、色彩は人間生活の鏡といつていいほど人間生活と密接な関聯を持ち、立派に文化の一要素として、文化の一面を荷担してゐる。ここに色彩文化史としての研究が成立する。自分の研究の中で、多少とも誇り得るものがありとすれば、それは古代の色彩の復元研究である。古代日本人の生活と密接な関係のあつた色彩の真相を捕捉しようとしたことである。

色彩に対して古代人が持つた精神内容を知るためにも、さらに広く古代人の心理生活、古代の社会心理を知るためにも、古代の色彩の真相を掴むことは絶対に必要なことである。言ふまでもなく、古代の色相は、古代の染色法によつて把握するほかはない。これに何十年かの歲月がかかつてしまつたといふ。

「蘇芳染といふ色があるね。これ一つだつて復元するととなかなか困難だ。勿論、蘇芳で染めたのだが、この蘇芳を探し出すのが容易ではない。今、日本では、春、葉の発芽前に豆のやうな花を咲かせる灌木を蘇芳と呼んでゐる。通常たれでもこの花か木皮で染めるのが蘇芳染と思ひやすいが、それは違ふんだよ、君。古代染料の蘇芳は、その頃ビルマ地方から輸入した番木の材を細かい屑にしたものさ、また丁子染にしても、いま日本にある例の、春、芳香を放つ丁子とは違ふ。これは当時南洋から輸入した番木の花の苔を使つたんだ。紫草とか椴とかいろいろあるが、いづれも名称は同じでも古代

と現代ではその実体がまるで違ふ」

兩山は、四十年の研究歲月の何分の一かを染料と媒染剤の決定に費し、漸くこの問題を片付けると、今度は染色の手法と操作の困難な問題に逢着した。唯一の手懸りは延喜式だが、それには染料、媒染剤、顯色剤の用量の記入はあるが、操作の順序、手法については全く触れてゐない。一種の染料で一つ色相を染める場合はまだいいとして、二種の染料を用ひる場合は、二種の染料を混合して染めるか、重ねて染めるかが判らない。結局一つ一つの染料の性質を知つて、そこに合理的な方法を見出す以外仕方がない。そこで兩山は半生の大部分をかけて、各々の染料に当時用ひた媒染剤のそれぞれを作用させてみて、それがいかなる現象を呈するかをみる勞多くして功少い実験と取組んできたのだといふ。

「一つの植物体から色素を抽出するまでも長い歲月がかかる。ただ煮ただけでは出ない。紅は紅花といふ草の花弁から採るんだが、その工程操作が厄介だ。山形県の世泊村から種子を持つて来て庭で栽培して、それを加工して最後の製品を造るまでには六年かかった。藍も六年ぐらゐるかかつてゐる。紫草は岩手県から種子を探し出して三年くり返して失敗し、次は根を宮城県から移植したがこれも失敗、発芽したが中途で枯れてね」

兩山は世間話でもするやうな調子で、そんなことを語つた。さうした話は聞いてゐて、速水

にも面白かつた。兩山が話をしてゐる間に老夫人がお茶を運んで来た。

「大変なお道楽でして、お蔭で私も一生染物屋さんを手伝はせられましたね」

兩山と同年代配の、質素な身なりの夫人の笑顔も兩山に劣らず美しいものだった。

「藍が立つやうになれば紺屋も一人前だと言はれるさうですが、どうやら私も一人前になりました」

そんなことを夫人は言つた。染料の抽出に最も適当な度合ひの検出が難しくて、藍の場合はテストを何百回も繰返したと、傍らから兩山が夫人の言葉の説明した。そして夫人は速水の方を向いて、兩山は庭の方を向いて、二人はめいめいの姿勢で、同じやうな静かな声を立てて笑つた。

話が一段落すると、

「ぢやあ、ひとつ製品をお目にかけようか」

と、兩山は立上つて部屋を出て行つたが、暫くすると、種々の色彩に染上げた布の巻物を両手いっぱい抱へて戻つて来た。そしてその兩山の背後から、これまた同じやうなものを持つて現はれたのが景子だった。

「僕の娘だよ」と兩山は言つた。

景子はその時黙つて挨拶したが、顔を上げしなに見せた笑顔が母に似て清純な感じだった。

兩山の口から、紫とか茜とか紅花とか、あるひは荊安、黄蘗、藍、大青、さうした言葉が飛び出す度に、景子はそれに相当する色彩の布を

抜き出して、その布の束を速水に手渡したり、着物の柄の品定めでもするやうに、ちよつと自分の肩の辺に髣してそれを速水に見せたりした。「どう、綺麗だらう！」

と、兩山が言つた時、景子は白樫の樹皮を鉄で媒染して染上げたといふ黒色の布を肩から胸へ掛けるやうにして支へてゐた。枕の草子に、二位三位の袍をしらかしで染めたと出て来るが、これなんだよと、兩山は言つたが、なるほどさう思つてみると、品位の高い深い黒色であつた。その黒色のせみか、景子の化粧してない顔の白さが薄暗い部屋の空間に浮き出て、綺麗だらうと言はれた時、その言葉が景子を指して言はれたのではないかと思つたほど、景子の顔はその瞬間、速水の眼にはむしろ生き生きと上気したやうな美しさに映つた。

その日はほんの一寸と思つた訪問が、兩山に引留められて、夕食まで御馳走になり、結局速水は夜の汽車で東京へ帰つた。

このことがあつてから、速水は時々暇を造つて沼津まで出掛け、佐竹兩山の家を訪れるやうになつた。肝心の『日本色彩文化史の研究』の出版は、その後速水もさらに知合ひの大学教授の紹介状を貰つたりして二三の大出版社にも当つてみたが、いづれにせよ、さういふ特殊な出版は、出版界の混乱が落着くまではてんで話にならないらしく、結局は二三年先きまでそのままにしておかねばならぬ四圍の状況のやうだつた。

實際、佐竹雨山の仕事が世に出るためには出版社の大きい理解と損得を度外視した犠牲的精神がなければ望み得ないことであつた。雨山は自分が半生をかけて染上げた色々の色彩の見本を、一寸四方ぐらゐの大きさに切つて、それを書物の中へ挿入しようとしてゐた。そして現在彼が持つてゐる色染めした製品からは五百部の書物に挿入できる見本が取れる筈であつた。かなり龐大な頁数になる三巻の、五百部限定出版となると、速水の素人眼から見ても、その上梓には様々な困難な問題が含まれてゐるやうに思はれた。

何度目かの訪問の時だつた。

「いいさ、五年先きでも、十年先きでも、いつか出版ができればね。僕が死んだら、万事君と景子に任せるよ」

雨山はそんなことを言つた。丁度夕食の時、速水と雨山の他に、夫人も景子も一つの卓を囲んでゐた。その時思はず上げた速水の視線が景子のそれとかけ合ふと、景子はその眼を外さな

いでなんとなく静かに笑つた。

速水は、最初景子に会つた時、まだ二十四五の娘だと思つたが、その後彼女がもう三十に近い年配で、戦争中に一度軍医と結婚したが新婚一ヶ月で、夫が出征して間もなく戦死するといふ不幸な過去を持つてゐることを知つた。

景子の、若い女にしては珍らしいどこかに冷たいところのある落着きは、年齢といふよりはやはり過去の不幸から来るものやうであつた。

しかしその性格には、格別過去にさうした不幸を背負つてゐるやうな暗いところはなく、なにか陶器のやうな、明るいとその明るさに冷たいところがあつた。

雨山はその特別段他愛はなく、さうしたことと言つたのかも知れなかつたが、さう言はれてみると、四十になつてまだ独身でゐる速水と過去に一度結婚に破れた景子とが一緒になつてくればたらといふ考へが、雨山夫妻の頭を占めるといふことは、いかにも自然でもあり充分ありさうなことでもあつた。

速水とて、次第に頻繁に佐竹家を訪問するやうになつてゐる自分の心を、仔細に振返つて覗いてみると、景子の存在を意識してゐないとは言へなかつた。しかし、それより、景子の存在をもその構成要素とする佐竹家の静かな、そこにあると自然に心が揺すぶられて来るやうな家庭の雰囲気に取り付けられて、なんとなく明るい灯のやうなものを求める思ひで、速水は佐竹雨山の家を訪ねるといつた方が正しかつた。それは、あるひは家庭の雰囲気といつたものではなく、雨山その人の人柄が発散する一種いふべからざる特異な魅力の為す業であつたかも知れない。

「茜」といつても、僕のとほこれだけ違ふんだからね」

雨山はある時、著名な色彩研究家の著書を前に掲げて、そこに見本として挿入してある印刷の茜色と、自分が実際に野生茜の根をいろいろ

操作した挙句に染上げた緑色の茜の見本とを較べて言つた。實際、同じ茜とは呼び得ないほど両者は違つてゐた。

そして彼は暫くその著書の説明に眼を通してゐる風だつたが、急にそれをおくと、

「これが茜なんだよ、これが。茜とはかういふ色なんだ。これが茜といふ色の絶対だ」

ふと、いつたなく強い調子でいふ雨山を見上げると、雨山は一瞬の激情が過ぎたあとのやうに、煙草を銜へたまま、喪心した視線を庭の一角に投げてゐた。

その時、傍に景子もゐるが、景子はとみると、さうした父を、彼女は彼女でつき放したやうに、冷ややかに眺めてゐるのであつた。

名声や金といふことを、恐らく考へたこともないであらう雨山にしても、怒りといふものはあるやうであつた。速水はその時、俺はこの老旧師の、怒りといふか悲しみといふか、さうしたものには知らず識らずに惹かれて来てるのかも知れないと思つた。さうしたものを心の底に沈めてゐる雨山といふ人間と対座したいために、俺は沼津まで来るばると出掛けて来るのかも知れないと思つた。

しかし、雨山の言葉で、改めて景子を一人の自分に關係のある女性として見直すやうになつてから、もし景子への自分の関心が自然に愛情といへるやうなものに發展し得るなら、さうあつてほしいと速水は思つた。一人の女に逢つて、すぐそれに惚れ込んでゆくやうな熱情は、いつ

かもう、速水の年齢からは消えてゐたし、当の景子の人柄が、またどこかに速水にさうさせないものを持つてゐた。極く自然に愛情といふものに成長して行くなら、速水は思つた。しかし、永久に燃え上がらないのではないかといふ危惧のやうなものも、速水はかなりはつきりと感じてゐた。

しかし、常に、景子より兩山の方が、速水に近いところにあつた。

速水は、景子と家庭を持ち、そこから朝出勤し、夕方帰つてくる自分を想像することがあつた。それは充分楽しく幸福さうであつた。しかし、さうした場合も、速水はいつも自分を一枚のカンバスの中において眺めてゐた。さうした自分に気づくと、酒の醒め際のやうな、妙に味気ない気がして、結局今まで通り、時々その場限りの女を相手として、あとは自分一人で、なんの気兼ねも責任もなく生きて行くことが、自分に最も適した自分相応の生き方ではないかと思ふのであつた。

だが、二日の休暇を沼津の兩山の家で過し、東京へ帰つて来て、いま社の宿直室に横たはつてゐる速水は、昨日までの彼とは違つてゐた。彼は自分の心の内部に、いま何ものが新しく形成されつつあるのを感じてゐた。あるひは決して発芽しないかも知れないと思つてゐた種子が、思ひがけない外部からの力に依つて、徐ろに土を擡げて来たのを見るやうな、驚きと戸惑ひと危惧の念を混じへた複雑な感情であつた。

その日、珍しく景子は、五時の汽車で東京へ帰る速水を送つて行くと言つて、速水といつしよに連立つて家を出た。お成橋を渡つて、市街地に入つた時、速水は、

「一汽車遅らせて、海岸を歩いてみませうか」と言つた。お成橋を渡る時、潮の香をふくんだ狩野川の川風が、ふと、速水にそんな氣持を起させたのだつた。地方の小都市だけが持つあの何ものかの期待が漂つてゐる夏の明るい白い夕暮だつた。

「ええ」と景子は素直に返事をした。

二人は駅とは反対の道を取り、市街地をつつ切つて浜の方へ歩いて行つた。舗道がいつか尽きて、小さい砂粒の道に変わる頃から、あたりは松林になつた。その松林を抜けると、砂浜とそれに続く石の敷き詰められた駿河湾の荒い海岸が、暮れ方の静かな海に傾斜してゐた。

人影は少なかつた。しかしよく見ると、波打際や、小さい砂山の上や、そこらに点々と立つてゐる蓑簑張りの小屋の附近など、あちこちに二人三人と涼み客の小さい姿が見え、遠い狩野川の河口の方へかけて、それでも相当多くの人間が散らばつてゐるのであつた。

速水と景子は、暫く波打際を歩いてから、高くなつてゐる砂浜の一角に並んで腰を降ろした。

二人の間には、殆ど会話といふものがなかつた。海面は薄ら明るかつたが、あたりにはいか夕闇が立ちこめ始めてゐた。

速水は、景子と二人で並んで腰を降ろしてゐることに、次第に重苦しさを感じてきてゐた。話すべき何ものも思ひ当らなかつた。その苦しきは、景子とて同じやうであつた。二人は決してお互ひがお互ひに對して何ものでもないことを確めるために、散歩してゐるやうなものであつた。さうしてゐる時、

「あら！」と突然、景子は叫んだ。が、景子が気づく前に、速水は速水でその方へ視線を投げたのだ。二人が腰を降ろしてゐるところから一丁ほど離れた波打際に近い場所、突然、十数名の人影が入乱れた。全くそれは一瞬のうちには展開された乱闘だつた。土地の中学生らしい数名の一人が、速水と景子の前を声高に話しながら歩いて行つたが、向うからやつて来た別の人、恐らく修学旅行にでも来た他国の中学生らしい一団と擦れ違つたと思ふと、彼等は一問はど行き過ぎてからお互ひに立止まつた。そして、次の瞬間、一人が仲間から離れてつかつかと相手の方へ近寄つたかと思ふと、まるでそれが合図であつたかの如く、彼等は入乱れてお互ひを目がけて飛びついた。帽子が飛び、革帯が円を描き、小石が、二人の足許の所にまで降つて来た。どちらの仲間か解らないが、三つの人影が倒れた。と見る間に、追ふのが追はれるのか、十数名の狼藉者たちは一団となつて、入乱れた体形のまま磯の上を走り、砂山を越え、松林の方へ駆け去つて行つた。倒れた三つの人影も敏捷に立上ると、前後して、同じやうに彼等の後



を追つて行つた。

ほんの一、二分の降つて沸いたやうな海浜の騷擾事件だつた。彼等の去つた後には、何かひどく贅沢なものが辺り一面に撒き散らされてある感じだつた。やがて浜は、何事もなかつたやうに、元の静けさに帰つた。

気がついてみると、景子はびつたりと速水に寄り添つてゐた。速水は不思議なものを見るやうに、自分の膝の上に置かれた景子の手を眺めた。そして、砂の上に崩れた恰好で横坐りに坐つてゐる景子の、白い項を見た。

景子は自分のさうした姿態に気づいたのか、すぐ身を起し、速水から離れると、膝を合はせた脚を前に伸べ、その上で着物の裾の砂を払つた。

ふしぎな、何故とも解らぬ深い悲哀感が、いま、自分を深く押包んでゐるのを速水は感じた。それは、無意味、無益な青春の狼藉の火花が彼に残して行つたものであつた。確かに青春への嫉妬のやうな、もうどうすることも出来ぬ救ひやうのない悲哀だつた。速水は立上がらうと思つた。が、立上がらないで、彼の手は、突然殆ど不可抗力といつていい意志に支配されて、景子の肩を抱いた。そして、荒々しく景子を引き寄せると、その顔へ自分の顔を合はせようとして、唇を結んで（その時彼はさう感じた）、景子は顔をそむけて拒んでゐたが、やがて、自分から彼の方へ顔を向けると、ひどく素直な幼い感で速水の胸に顔を埋めた。

速水は再び唇を盗らうとはしなかつた。さうした姿勢のままで速水は実際にいま自分が景子を愛してゐることを感じた。そして将来も愛して行けることを感じた。自分が、もう長く彼女を愛し、彼女を求めたことを知つた。そして自分の長く続いた暗い人生に、ついこの瞬間まで思つてもみなかつた一つの灯がともらうとしてゐることを、まだ自分を冷たく濡らし続けてゐる悲哀と、どこからともなく彼を襲つた激情との入混じつた不思議な感情の中で、感じてゐたのであつた。

あ、ひどい雨だなと思つて速水は眼を覚ました。横なぐりに吹きつける雨が、ひつきりなしに窓硝子を敲いてゐる。併し速水は直ぐ自分が雨の音で眼を覚ましたのでないことを知つた。

「警視庁のクラブから電話です」

夜勤の守衛が、彼のベッドの横に立つてゐた。

速水はシャツの儘で寝てゐたが、それにズボンだけをつけると、スリッパをひつかけて廊下まで出て行つた。電話は覚からだつた。息をひそめた低い声を受話器の奥から伝はつて来る。

「どうも、下山が死体になつて発見されたらしいんです。捜査一課の部屋を注意してゐたんですが、捜査一課長も二係長も、いま自動車で行きました。どうも下山の……」

あとは二三回聞き返したが、聞きとれなかつた。下山の死体といふ抑揚を殺した眩々やうな言葉が、速水の寝不足のはつきりしない頭の中

で、正當な一つの意味を持つて来るまでには、極く僅かだが時間がかかつた。

「どこ、場所は？」

と速水は訊いたが、それに答へる筈の声は今度もよく聞き取れなかつた。向うでも、それを察したらしく、

「とにかく、カメラを連れて、警視庁の横手に自動車を廻しておいて下さい。いいですか、横手ですよ、頼みます」

それだけが、ややはつきりした声で聞き取れた。

その電話を切ると、直ぐ自動車部へ自動車の用意を頼んでおいて、それから写真部の宿直室への連絡を守衛に任せると、彼は煙草に火を点けて、直ぐ横手の廊下の突き当りの小さい露台へ出る扉の所まで行つた。少し扉を開けて外気を吸ひたかつたが、雨が吹き込みさうなので、それを止めて、扉に覗き窓のやうにはめこんである小さい硝子から窓外を覗いた。五階のそこからは漆黒の闇のほか何も見えなかつた。

速水は暫くそこに立つてゐた。形も大きさも解らない熔岩の流れのやうなものが、どこか遠くで、あるひは極く身近かで、ひどく緩慢な動きだが着実に、あらゆるものを席捲しつつ流動してゐるのを感じた。それが何であるか、はつきりとは解らなかつた。ともかくそれが、下山総裁といふ一個の人間を押しひしぎ飲み込んでしまつたのを感じた。漠然と、来るものが来たといふ、つひぞ今まで考へても見なかつた感慨



が、速水を、一本の煙草の五分の一を飲むまでそこに佇立させてゐた。

速水は宿直室へ戻ると、彼とは同期で部の中では一番親しい副部長の石井を起して、警視庁からの電話のことを伝えて、

「俺が行つて来る」と言つた。

「誰か連れて行くか」と石井が言ふのを、  
「いいだらう」

と彼は断つた。警視庁のクラブには寃のほか六名の記者が万一の場合を警戒して泊り込んでゐる筈だつた。

速水は手早く身支度すると、そこにあつた誰かのレインコートを羽織つて、丁度来合はせたカメラの中橋と並んで、旋回してゐる薄暗い階段を地階まで降りて、工場の一隅を抜けて、社の裏門へ出た。

自動車は既にそこに待つてゐた。ヘッドライトの光が、そこだけ舗道にぶつかつてゐる様々つくやうな雨脚を見せてゐる。

「ひでえことになりやあがつた！」

と、中橋がカメラバッグを抱へて自動車の中へ駆け込んだ後から、速水も白い夏服の襟を立て、レインコートを頭から冠つて、自動車へ乗込んで行つた。時計を見ると四時半である。外は真闇だつた。

日比谷から濠端を通つて、警視庁の横手の街路樹の下に自動車を停めると、間もなく舗道を、寃と若い記者のSが、自動車をめがけて転がるやうに走つて来た。二人が乗込むと、自動車は

又走り出した。

「千住。千住の方へ頼む」

運転手に行先を告げてから、寃は言つた。「どうも、下山だと思ふんです。他社はまだ気づいてゐません。先刻の電話は一課の事務所から掛けました」

その口調が、さすがに少し興奮してゐた。

寃も、今夜はクラブの宿直室が満員で、机の上に毛布を敷いて寝てゐたのだが、捜査一課に詰めてゐた去年入社した若い記者のMに起され、聞いてみると、捜査一課長と二係長がいま自動車を出て行つたといふ。そこで直ぐ一階の一課へ降りて行つて残つてゐる刑事に当たると、千住大橋の鉄橋の下に死体が転がつてゐる。どうも下山らしいと言ふことだつた。

「間違ひないかと念を押したんですが、間違ひないらしいと言ふんです。西新井署から電話が入つたんださうです。捜査一課長と二係長が出かけたんですから、まあ間違ひないでせう。それから寃は、狭い車内で窮屈さうに躰をねぢ曲げながら煙草に火を点けて、

「もしかしたらO社の奴が気付いてゐるかも知れませんが。僕と入違ひに一課へ入つて行きやあがつた！」

と言つた。色の白い小肥りの寃の精力的な顔が少し上気してゐる。いつも身綺麗にしてゐるお洒落な彼は、こんな場合でも、白のダブルの上着の釦をきちんと掛け、ちよつと外国の映画俳優のやうなこなしで、煙草を人差指と中指の

間に挟んで、それを宙に支へてゐた。

自動車は小川町を抜けて、上野へ出て、車坂を通つて行つた。寃も中橋もSも、時々暗い前方をすかしたり、窓硝子を手でこすつたりして、自動車の走つてゐる位置を確かめてゐた。彼等の前にはただ事件だけがあるやうであつた。

速水は眼をつむつて、右手の窓際の席に、身をもたせてゐた。この自動車の行きつく場所に、下山総裁であるか否かは別にして、一人の人間の死体が置かれてゐることを思つた。そこにある雨に打たれた濡れた一個の生命活動を停止した肉体が、なぜか速水の眼には、全裸体の白く漂白された肉塊として浮かんで来るのであつた。岩礁と岩礁との間の、潮が絶えず、小さい音を立ててゐる狭く暗い冷たい場所、そこに投げ出されてゐる不思議な白い柔かい物体、それにナイフを入れたやうにへばりついてゐる一条の青い海藻！ やはりかうした吹き降りの日、同じやうに自動車に揺られて、もう永久に明けないかも知れないやうな深い夜の中を、どこまでも走つてゐた記憶がある。十六年の歳月が消えて、時間が直接にあの夜に続いてゐるやうな気がする。ああ、いやだと、速水はその幻想を追ひ払ふやうに身を起して訊いた。

「どこだい」

「千住大橋を渡つてゐます」

運転手が答へた。依然、窗外はひどい吹き降りだつた。

新大橋を渡り切つた所で自動車を停めると、